

被害の地・広島に加害について

山内正之
山内静代
(毒ガス島歴史研究所)

山内正之 皆さん、こんにちは。広島からやってきましたけれども、こういう場で話をさせていただくことはめったにないことなんで、うまくしゃべれるかどうかわかりませんが、頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします。

私は66歳です。今日、誕生日なんですよ（拍手）。今もう学校を退職して、張先生が紹介くださったように、大久野島、かつて毒ガスをつくっていた島、しかもその毒ガスを使って日本がたくさんの外国人を殺したり傷つけた歴史を地元で伝える活動をしようと毒ガス島歴史研究所という団体をつくって活動しています。ホームページにも資料等をアップしておりますので、何かの折にはぜひ見ていただきたいと思います。

広島から

皆さんは、広島といたら原爆のことはよくご存じだと思うんですね。世界で初めて原爆が投下されて、たくさんの方の命が失われました。（広島原爆被害者の写真を見せながら⁽¹⁾）広島の方で見られた方もおられると思いますけど、日本人として絶対に忘れてはならないこと、これは広島・長崎の原爆。ほかにもたくさん戦争の被害の歴史はありますが、きちっと日本人の心にとめて、世界に向けて二度とこういう悲惨なことを繰り返してはならないと訴えていかないとイケないですね。そういう意味でこの写真は非常に貴重で

す。

これは有名な写真です。広島原爆ドームの近くにある平和記念館にはこういった写真がたくさん掲載されています。教科書にもよく載せられている写真なんですが、原爆が投下されて10分後に撮られた写真なんです。原爆を受けて、みんなで御幸橋という橋のもとへ逃げている様子なんです。この女学生の写真も資料館では有名ですけど、多分動員学徒で、どこかの作業場に行っていたでしょう。そのとき被害を受けて、かばんを肩にかけてたんですね。ここにその跡がくっきりと残ってますね。原爆というのは本当にすごい熱線で、あっという間に人間を焼き尽くしてしまいますから、すごい被害を皆受けているんですね。

同じく広島被害者の写真です。これも広島原爆によって被害を受けた方、こちらは兵隊さんらしいですね。この写真を撮られた1時間後には命を落とされたようです。こういう悲惨なことを二度と繰り返してはならない。これは「ノーモア・ヒロシマ」という言葉で世界に訴えていますね。この言葉は皆さんよくご存じだと思うんですね。

今年8月6日に平和式典、いつも慰霊祭があるんですけど、そのときに原爆の被害を受けて亡くなった人の数が発表されています。26万5000人を超えてるんですね。もちろん兵隊さんもおられますけど、圧倒的多数は一般の広島市民、あるい

は在日朝鮮人の方も、強制的に連れてこられた中国人の方も、いろいろな方がおられます。そういう風に広島におられた方は皆何らかの形で命を落としてたり、いわゆる被害を受けられた歴史があるということですね。

もう一つ写真を見てください。今度は8月9日、長崎に2発目の原爆が落とされた。そのときの被害者の写真です。この背中が真っ赤に焼けただれた男の子、16才なんですね。この方は幸い命を取りとめて、いま一生懸命核廃絶を訴えておられます。すごい被害を受けられたんですけども、幸い命が助かって、自分の一生をいわゆる核兵器廃絶のために活動されている。

これも長崎の被害者の写真ですね。小学生の写真です。この子は一瞬のうちにこういう状態にされた。しかも、この子は爆心地から700メートル離れたところでこのように炭になってたんですね。いかに原爆の熱線がひどいものかわかりますよね。この子は一瞬のうちに炭にされた。この子はまさか自分がこんなことになるとは夢にも思っていなかったと思うんです。これが原爆なんですよ。

広島^の原爆、長崎^の原爆、ともにたくさんの人の命を奪い、傷つけました。その中でたくさんの子供たちが命を失ったり傷ついているんですね。だからこの写真も子供たちの写真が多いですよ。原爆の恐ろしさは無差別に人を殺し傷つけることです。もちろん戦争はいけませんよ。1対1で撃ち合うことも人殺しをすることですから、戦争はやっぱり避けなくてはなりません。でも、本当に戦争には関係ないような一般市民までも一瞬のうちに殺したり傷つけたりする、こういう兵器はやっぱり二度と使わせてはならないです。日本人として世界に訴えていくことは大事なことだと思います。

戦争が終わってから、広島はずっと「ノーモア・ヒロシマ」を訴えてきたんですね。だけど、

第二次世界大戦中に使われたこんな悲惨な兵器は原爆だけではないんですね。今日お話しする毒ガス、これも原爆ほど破壊力はないですよ。でもいったん使えば、そこにいる人、だれもが傷ついていく、あるいは殺されるということにおいては一緒なんです。今度は、毒ガスを使ったらどんな悲惨な状態が起こるか、写真で見てもらって話をしたいと思います。

これは毒ガスによって被害を受けた人の写真です。ただし、日本軍が第二次世界大戦中に与えた被害ではありません。第二次世界大戦中、日本は秘密の中で毒ガスを使っていますから、写真もほとんど残ってないのです。だからこれらの写真は同じ毒ガスの被害者でも、イラン・イラク戦争のときに受けた被害者の写真です。1980年イラン・イラク戦争が起こったそのときに毒ガスが使われた。イラクがイランの人に対して使ったときの被害者の写真です。

これは毒ガスの被害者の写真です。上の顔が水膨れびらんみたいになすごくなってる、これは糜爛びらんといいます。やけどみたいに水膨れがいっぱいできていでしょう。毒の影響で顔についた症状なんですね。毒ガスの液がついた糜爛びらんというのは普通のやけどじゃないんです。普通のやけどは、やけたところの肌に水膨れができて、そこをうまく治療すれば快方に向かうんですね。毒ガスはそうじゃないんですよ。ここに液を浴びたら、浴びたところの皮膚を腐らせていくんです。細胞をずっと破壊していくんですね。いくら表面だけを治しても、また下のほうにずっと細胞を腐らせていきますから、後からどんどん患部がまた水膨れで、治療をしてもまた水膨れ、どんどん症状が悪化することが多いですね。

この下の子供を見てください。今もう水膨れはなくなってますよね。でもこれで終わりじゃないんですよ。またここに水膨れが、糜爛びらんが出てくるんです。繰り返し繰り返し出てきて被害者を苦し

める。しかも皮膚を腐らせるわけですから、すごい激痛が伴うらしいですね。本当に毒ガスは原爆とよく似ているんです。被害を受けたらすぐ治るもんじゃないです。

もう一つ見てもらいますね。これもイラン・イラク戦争での被害者の写真です。今度は毒ガスで殺されてる写真です。この子、何歳でしょう。これが毒ガスなんです。もういったん使えば、これは大人だろうが、子供だろうが、ことごとく殺し傷つけるのが毒ガスなんです。原爆と一緒にですよ。そういう兵器を残念なことに第二次世界大戦中、日本が使ったんです。この写真はイラン・イラク戦争の被害者ですけど、中国で日本軍が使った毒ガスで同じような被害者がいっぱい出ているんですね。そういう歴史があるんです。

日本軍による毒ガス兵器の使用

そういう悲惨な歴史があるにもかかわらず、日本人のほとんどの人が知らないです。広島の前爆のことはほとんどの人は知ってます。特にここいま集まられている方は、8月6日に広島でどんなことが起こったか、あるいは8月9日に長崎でどんなことが起こったか、ほとんど皆知っておられると思います。でも同じように悲惨な武器が使われ、悲惨な歴史があるのに、日本軍がやった悲惨な歴史がほとんど日本人に知られていない。これは大きな問題ですね。

私たちはそれを伝えていくことは絶対重要だということで、大久野島の歴史を調べて、みんなで伝える活動をやっているところなんです。今日はこういう機会に、大久野島の毒ガスの歴史がどういう経過をたどって、何で日本人にあまり知られてなかったのか、そのことをしゃべらせてもらおうと思います。

皆さんのお手元の冊子がいま私たちが活動している大久野島という島です。この島はいま観光地になっています。きれいですよ。ぜひ来てください。

ウサギが約300匹住んでます。しかも野放しです。だから、だれが来てもウサギがいっぱい集まってきます。何か自分がスターになった気分になりますよ。わーっと集まってきますからね。みんなに愛される、いわゆる憩いの島になっているんですね。でも昔は島全体が毒ガス工場だったんですね。

島全体が秘密の毒ガス工場になる前は、3軒の農家が平和に暮らしてたんです。農業をやって、平和でのどかな生活をしてたのですよ。ところが、そこに毒ガス工場をつくるんだということで、あんたたちは出ていきなさいと全部追い出された。毒ガス製造が始まったのが1929年。工事は27年から始まってんですけど、それ以来この島に住民は一人も住んでないんですよ。観光地になって自然豊かな島になってます。今も住民はだれもいないんです。今この島は環境省が管理しています。国民休暇村がつくられて、ホテルがあって、観光で来る人たちも十分楽しめるような島になっています。

もちろんかつてそういう悲惨な歴史がありましたから、平和学習に小学生、中学生、高校生、大学生、大人がやってきます。そういう人たちのお手伝いをするのが私たちのボランティア活動です。

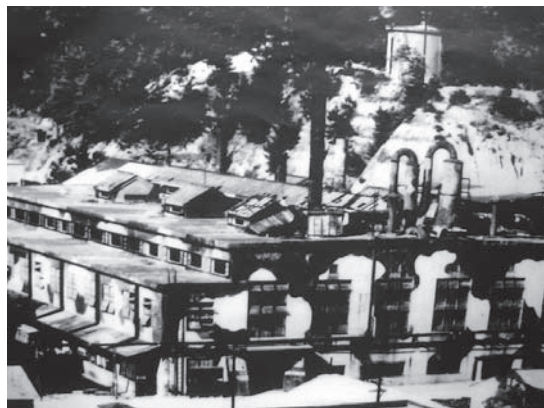
この島で結局、毒ガスを日本は15年間つくりました。これは今の写真で、国民休暇村の宿舎の写



写真①：現在の休暇村大久野島（国民宿舎）

真です（写真①）。大体200人ぐらい泊まれるような結構大きなホテルなんです。このホテルがあった同じ場所にはかつて毒ガス工場があったんですね（写真②）。いま行ったら、こんな写真を見なかったら、毒ガスの工場があってなんて信じられんぐらい平和です。

もう1枚写真を見てください（写真③）。写真をつないでつくったんですけど、これが大久野島の毒ガス工場です。これがすべてじゃないですよ。メインな工場地帯で、いろんな種類の毒ガスがつくられていました。これは陸軍の毒ガス工場です。日本にはもう一つ毒ガスの生産工場がありました。2カ所しかなかったです。国際条約に使ってはいけない兵器だったから、あちこちでつくってはいけません。陸軍の毒ガス工場は大久野島。もう一つ、海軍の工場があったんですね。



写真②：国民宿舎の場所にあったルイサイト工場



写真③：大久野島の三軒家毒ガス工場群（現在の国民宿舎前広場にあった）

この近くにある寒川町、相模の海軍工廠に海軍の毒ガス工場があったんですよ。海軍の毒ガス工場はもともとは平塚に仮の工場があって、それが寒川町に移って、本格的な工場として活動するようになったんですね。だから7～8年前に平塚で毒ガスのガラスの玉が見つかりましたよね、チビというね。日本の毒ガスの工場は2カ所しかない。1カ所は大久野島、1カ所がこの近くの平塚。そういうところにあったということもぜひ知っておいてくださいね。

しかも大事なこと、日本軍が戦争中につくって使った毒ガスは、その当時、国際条約では使ってはいけないという、禁止された兵器だったんですね。1919年のベルサイユ条約、ここでみんな集まって、一般の人たちも全部殺してしまう、小さい子供たちも全部傷つけてしまう、こんな兵器は使うまあやいう約束をしました。

何でベルサイユ条約でそういうことをやったかといったら、実は第一次世界大戦では毒ガス戦争と言われてるぐらい、いっぱい使ったんです。そのときの写真がこれです。これは第一次世界大戦中の、イギリスの兵隊が毒ガスで苦しんでる写真です。下は逆にイギリス軍が毒ガス戦をやってる写真です。このときには最初にドイツが使い始めたらしい。ドイツが毒ガスを使ってたくさんのイギリス兵を殺したもんだから、それならうちもやろうということで、今度はイギリスが新しい毒ガスを開発して使用し、フランスも使う、アメリカも使う、ロシアも使う。とにかく第一次世界大戦で、ヨーロッパで戦った国は皆毒ガスを使い出しました。

しかも毒ガスというのはいろんな種類ができるんですよ。いろんな薬物をまぜ合わせればより強力なのができるんですね。各国が競争でより殺人力の強い毒ガスをつくって使ったもんだから、実に4年間で130万人もヨーロッパの人が毒ガスで死んだり傷ついたりした。それでベルサイユ条約

で集まった時に、こんな悲惨な兵器は使わないようにしようということをやめたんです。じゃ日本はどういう態度をとったか。賛成しました。当然だと、そんな悲惨な兵器は使うべきではないという意思表示をしたんです。

しかもその後、1925年にジュネーブ議定書というのを世界各国が結んでいます。日本はジュネーブ議定書には一応賛成はしたんですけど、最終的な批准はしてないです。ほかの国はほとんどが批准したんですけど。そのときにも毒ガス兵器と細菌兵器は一般の人も全部巻き込むような兵器だからやめようという約束をしたんです。

原爆はまだできてなかったから、使ってはいけないことになってなかったんですよ。でもできておいたら同じですよ。だって、無差別大量殺人兵器ですからね。原爆はまだできてなかったから、対象は毒ガス兵器だったんです。ねらいは何かというと、戦争に関係ない子供たちまで、あるいは老人まで、皆殺したり傷つけるような兵器は絶対使わしてはいけないというのが趣旨だったんです。日本は国際条約では毒ガス使用禁止に賛成しておきながら、大久野島でひそかに毒ガスをつくって、ひそかに戦争で使っていたんです。

マレーシアとかインドネシアなどの東南アジアでも使ったんですよ。でも、東南アジア方面で使ったのは量も少ないし回数も少ないです。一番たくさん使ったのは中国です。中国ではたくさんの人が毒ガスで殺されたり傷ついたんです。これが日本軍が中国で毒ガス戦をやっているときの写真です。上の写真は上海。いま万博が行われてますが、防毒面をかぶってるのは日本の兵隊ですね。上海の市街で毒ガス戦をしているところです。自分たちは防毒面かぶるとかには危ないですよ。煙が反対に吹いてきたら自分らも毒ガス吸いますからね。これは日本の兵隊なんです。

これも貴重な写真です。1937年に湖北省で実際に日本軍が毒ガスを使って中国の村を攻撃してる

写真なんです。戦争中に使ってはいけない毒ガスを使っておる写真なんて、もうめったに手に入らないんですけど、たまたま従軍記者が撮った写真が戦後出てきたんです。ここにいるのは日本の兵隊です。この煙が毒ガスです。毒ガスと発煙筒をまぜて使っている。この煙の向こうには当然中国の村がある。こういうようにして、日本軍は中国では盛んに毒ガスを使ったんです。

戦争中、中国はそれを調べる余裕はなかった。戦争が終わって、平和を取り戻して調べたら、はっきりとした証拠がつかめただけで、日本軍は2000回以上毒ガスを使っている。9万人以上の中国人を毒ガスで殺したり傷つけている、そういうデータがはっきりとわかったんです。

もちろんこれは戦争が終わって大分たってから調べておるんです。中国は日本の侵略戦争が終わり告げるときからは、今度は国民党と共産党の内戦が始まりました。だから日本の戦争犯罪を、あるいは毒ガスをどこでどう使ったかいうのを細かく調べるような余裕はなかったんです。かなり時間がたってからの調査ですから、十分な調査ができにくい状況だったんです。本当は2000回以上使ってると言えると思うんです。ただ、はっきりとした証拠があるのが2000回、でも日本は国際条約では使わないときちんと表明してるんですよ。それを一回でも使ったらば問題です。2000回以上も使って、しかも9万人以上の中国人を毒ガスで殺傷しているということは事実です。当然、戦争が終わったら問題にならなにかんです。

闇に葬られた毒ガス兵器

ところが戦争が終わったときに日本の戦争について裁いた東京裁判、極東国際軍事裁判ですね、1946年に行われました。東条英機ら日本を侵略戦争に導いたという責任者は絞首刑になりました。いろんな戦争の事実が裁かれる。日本は当然ここで毒ガス使用の国際条約違反のことを裁かれなく

てはならなかった。国際条約に違反した兵器を2000回以上も使って、しかもたくさんの中国人を殺傷し、東南アジアでも使ってるんですから。ところが、この裁判から外されたんです。

何で外されたかが一番問題なんです。日本がやった毒ガス犯罪は絶対裁かなければいけないと、アメリカのモローという人が一生懸命日本軍の毒ガス使用の証拠を集め、裁判にかける準備をしてました。裁判にかけたら十分日本軍が毒ガスを使ったことが証明できるデータを全部集めていたのです。ところがいよいよ裁判にのせるぞという時、アメリカの陸軍の化学統括部隊が、それはまずいとストップをかけた。日本の毒ガス戦を裁いたら、これからアメリカが毒ガス戦をやれんようになる、それは困る。それでマッカーサーに言って、マッカーサーからモローのところへ、裁判にかけるのはやめとけということになったんです。

ベルサイユ条約とかジュネーブ議定書では、使ってはいけないという禁止だったんですね。しかしつくって持っておくことは禁止してなかったんです。だから第二次世界大戦中も、アメリカも持ってる、イギリスも持ってる、ドイツも持ってる。みんな持ってたんですよ。イギリスは毒ガスの数を日本の5倍持ってたんです。ドイツは日本の10倍持ってたんです。アメリカは日本よりもより強力な毒ガスを20倍持ってたんです。東京裁判のときにアメリカは世界一の毒ガス兵器所有国だったんですね。第二次世界大戦後、アメリカが毒ガスを使えんようになると困るという理由で、この裁判から外して日本がやった毒ガス戦の歴史を闇に葬ってしまったんですね。だから日本人も知らない人が多い。

日本政府は知っておりますよ。だって、東条英機が命令を出しておったんですから。日本が毒ガス戦をやめたのは戦争が終わる1年前なんです。日本は毒ガスを1929年に本格的につくり出し

て、戦争で使い出したんですけど、毒ガスを使うのをやめたのは1944年7月。東条英機が命令を出して、これからは毒ガス戦はやめ、一切使ってはならない。大久野島でも毒ガスの製造は中止せよと命令を出しました。それで日本軍はやめたんです。戦争が終わる1年前ですよ。何でやめたかといったら、アメリカに警告されたんです⁽²⁾。日本は中国でこっそりと毒ガスを使って、たくさんの中国人を殺傷しよる。国際条約違反じゃないか。もし日本がそれをやり続けるなら、アメリカも使うよと。

日本は戦争中はアメリカに対しては使うなという命令を出しておったんです。中国に対しては使ってもいいけど、アメリカに対しては使うなという命令です。アメリカに対して使ったら逆にアメリカが、報復攻撃に毒ガスを使ってきたら勝てないからです。日本の20倍持ってるんだから。しかも日本よりもはるかに強力な毒ガスを持ってる。それで、戦争中はアメリカに対して日本は使わなかった。アメリカも国際条約でみんな使えないという約束しておる兵器だから、あえて使わなかったんですね。

だけど中国に対しては日本は使った。何でかいうたら、中国にはそれに対抗する能力がなかった。毒ガスをちょっとは持ってたけど、たかが知れてる。しかも防護体制が全然劣ってたんですね。日本軍はアメリカに対しては使ったら報復が怖いから使わないけど、中国には使えたんですね。今、お話ししたことは、2007年9月2日に放送されたNHKの「ETV特集 裁かれなかった毒ガス作戦」という番組で放送されています。

アメリカが東京裁判から外した理由がもう一つ考えられます。それは原爆です。もし日本の毒ガス戦を裁いたら、日本は確かに毒ガスで中国の人をたくさん殺したりした、それじゃアメリカの原爆はどうなるのか、あれも無差別大量殺人兵器じゃないのかという世論が巻き起こる可能性がある

る。それはまずいと計算した可能性を指摘する学者もおります。それはあくまで可能性があるというだけで、はっきりしてません。ただ、これからアメリカが毒ガスを使えなくなるのはまずいというのははっきりしています。そういうような理由で外された。日本人は知らないんです。日本政府もそれをいいことに黙ってる。しかも大人が黙ってるだけじゃないですよ。子供たちにも何も教えない。子供たちも知らないです。

例えばこれを見てください。これは社会科の教科書です。上が小学校の教科書、下が中学校の教科書です。コピーしましたが、これは2ページにわたってるんですよ。全部に原爆のことはちゃんと出てます。広島が焼け野原になった原爆の悲惨な写真です。これから二度とこういう悲惨なことを起こさんようにしましょうって教えてます。でも日本軍は原爆で被害は受けたけど、一方では毒ガスでこういうことをやったら加害のことは一言も出てない。日本政府はあえてそういうことを出そうとはしてない。結局大久野島の日本軍の毒ガスの歴史は日本人には知られないままにずっと来ているんですね。日本政府もそれをずっと黙ってきたんですね。残念ながらそういう歴史がある。

そういう歴史がやっとなんか、大変なことをやっていたんだということが知られるようになったのは1984年のことです。実は日本軍が毒ガス戦をやっておったという証拠が公になったんです。1984年6月15日の『朝日新聞』の第1面に出たんですね。立教大学の粟屋憲太郎先生が、アメリカの公文書館で自分の研究テーマを調べていたら、その中に日本軍がやった毒ガス戦の資料が見つかったんです。多分、裁判でモローが集めた資料の一部だったんだと思うんですけどね。

これを見てびっくりして、日本軍は大変なことをやっているじゃないか、表に出てないだけで。粟屋先生が見つけたのは1983年なんですけ

ど、これが間違った情報だったら大変なことになるから、ちゃんと裏づけされたんです。1年間かけてずっと本当にそうかいうことを調べられたら、間違いない、日本は毒ガスをやってる。それで新聞に出された。

僕は久野島という毒ガスをつくった工場の近くで育ったんですけど、子供のときから毒ガス島のごことは知っていました。久野島では毒ガスをつくった、でも戦争では使うことはできへんかったって思っていました。使わなかったと。それは良かった、毒ガスを使って外国人をいっぱい傷つけたりしていないのでよかった、ぐらいにずっと思ってた。教員になってもそう思ってた。ところが、この資料のことを知って、僕もびっくりしましたね。使ってるんです。たくさんの人を殺してるんですね。日本国内でも1984年ぐらいからちょっとずつ日本軍の毒ガス戦争の事実が知られるようになったのです。

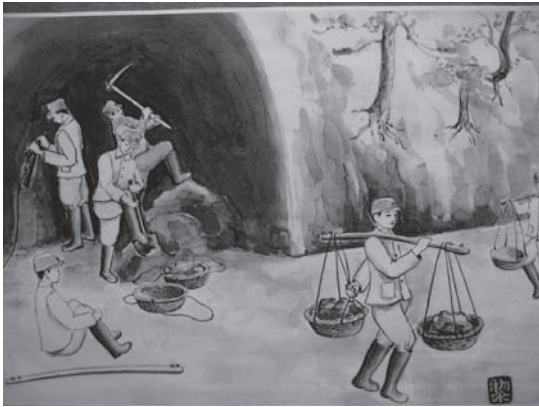
大久野島の毒ガス被害

今までで日本の加害のことをずっと話しましたが、久野島で15年間毒ガスをつくったわけですから、当然久野島で働いた人たちに被害がいっぱい出ておりますね。ちょっと視点を変えて被害の話させていただきます。

15年間毒ガスをつくった間に久野島で働いた人は約6,700人。もちろん毒ガスを実際につくる工員さん、これは一番危険な目に遭ってますよね。でも久野島で働いた人は工員さんだけじゃないんですよ。戦争がどんどん厳しくなったら徴用工、女子挺身隊、動員学徒、子供たちまで毒ガス工場に手伝いに行かされているんですね。これがその写真です（写真④）。13歳、14歳の、忠海中学校という、ちょうど久野島の向かいにある町の中学生たちです。久野島に行って防空壕を掘らされたり、あるいは工場の掃除をせいか言っって、いろんなことをやらされて、結局被害を

受けたわけですよ。

同じく女学生、これは忠海高等女学校の生徒です(写真⑤)。年はやっぱり13歳、14歳、この子たちも行っているような作業をしとるんです。こういう子供たちも含めて約6,700人の方が働きに行き、ほとんど被害を受けています。もちろん全員とは言いませんよ。軽いか重いかの差はあっても。大久野島に働きに行き毒ガスの被害を受けた人の症状で一番多いのが慢性気管支炎、のどをやられてます。普通、元気な私たちは気管に繊毛といって、ちゃんと毛が生えてるらしいですね。その繊毛は外からばい菌なんか吸ったら



写真④：学徒動員で防空壕を掘る中学生の絵



写真⑤：学徒動員で毒ガス缶を運ぶ女学生の絵

ちゃんとクリーニングするらしいです。それが大久野島で働いた人は、有毒なガスを吸っているため繊毛が破壊され、慢性気管支炎にほとんどの人がなってる。

慢性気管支炎になると冬に風邪を引きやすい。しかも風邪を引いたらせきが連続して出てとまらなくなる。本当に重い症状の慢性気管支炎の人は、夜中じゅうせくんですね。この写真の方はそうですね、片手にたんつぽ持って座ってます。横に寝ることができないんです。ずっとせきが出る。そのうちばい菌がたまっのどに詰まるから、吐き出しながら、ぜいぜい夜中じゅう深呼吸をするというか、せきをしながらやっと生きてる人ですね。

実際にこういうお父さんの症状を見た子供の話を聞いたことあるんですけど、最後は血のまざったたんを吐き出していたそうです。こういうひどい人は戦争が終わってどんどん死んでいきました。女学生なんかは比較的軽かったけど、やっぱり慢性気管支炎になったら皆戦争が終わってもずっと治療せにゃいかん。この写真は、女学生が慢性気管支炎になって治療している様子なんです。この女性たちも大久野島に来たときは13歳、14歳の本当に子供たちですよ。もう戦争が終わってもずっと後遺症で苦しんでる。

この写真を撮ったときは51歳です。今、この方たちは76歳ぐらいになっています。でもまだ後遺症がずっと続いて、病院に行き、やっぱりたんが詰まったりせきが出たりしたら、それを抑える薬を飲みながら、後遺症とずっと闘って生きておられる。毒ガスはいったん被害を受けると簡単に治らない。後遺症でずっと苦しむ。これは原爆と一緒にです。

それともう一つ、毒ガス被害者で多いのががんです。この写真の方はがんで亡くなった方なんですけど、守衛だったんですね。だから実際に毒ガスをつくったわけじゃないんですよ。でも肺がん

で亡くなりました。広島県にはいっぱい大久野島に働きに行った人がおりますから、広島大学の医師が戦後10年ぐらいたったときに、ある30歳ぐらいの比較的まだ年が若い男の人を診察した。その人は、肺がんだったんです。それで、その人が死んだときに解剖して調べたら、もうとんでもない、肺がむちゃくちゃやられとったらしいですね。30歳、31歳の若さで何でこんな肺になるんだと。何ぼ、たばこを吸い過ぎてもこれはおかしいと。その人の経歴を見たら、大久野島で働いていた。毒ガスはやっぱり肺がんなんかの大きな原因になつとるんじゃないかと思って、それで広島大学の医師たちが一般の人と大久野島で働いている人の肺がんの発生率の比較調査をされたんです。

大久野島で働いとる人は圧倒的にがんになってる人がいた。それで専門的に毒ガスの成分を調査されたら、はっきりしました。イベリットという毒ガスは発がん性があるんです。今は、大久野島で働いた体験のある人は自分ががんにいつなるかかもしれんという恐怖を持ちながら生きておられるのが現状です。

大久野島で毒ガスをつくり、それをどうしたかいうことを大体しゃべらせてもらいました。ただ私が言いたいのは、広島といえば原爆被害のことがばかりが話題に上ります。でもその原爆の被害を受けた広島から大久野島は車で1時間半もかからないんですね。ごくそばにある。その大久野島でつくった毒ガスが戦争中たくさん外国人を殺したり傷つけた。そういう歴史を残念ながら知らない人が多いことはすごく問題です。

本当に核兵器廃絶を訴え、世界の平和を訴えるんだったら、私たちは広島・長崎の原爆だけを世界に訴えたんでは力が届かないと思います。自分たちがやった加害の歴史もきちっと知り、反省すべきところは反省した上で世界に訴えていかなければ、本当の意味での訴える力が発揮できないんじゃないか。大久野島の歴史を勉強せにゃいか

ん、被害だけじゃいけないって全国からやってきます。広島に行って被害の勉強して、帰りに大久野島に寄って加害の勉強してくれる学校が、最近ちょっとずつふえています。でも、まだまだ少ないです。大久野島にそういう加害の歴史を勉強しに来る小中高学校、年間約200校です。そのうち僕らが40校ぐらいお手伝いしています。広島に被害の勉強しに何校行くとお思いますか。約7000校行くんですよ。だから本当はもっともっと大久野島に来て欲しいです。

もちろん広島の前爆のことは勉強していかなくしゃいかんですよ。でもあわせて自分たちがやった加害の歴史も一緒に勉強することが大切。これから若い子は世界に出ていくんでしょ。やっぱり被害のことも加害のこともきちっと勉強して、確かに日本はこういう悪いことをした、でも二度とこういうことは私たちはほしくないということを自信を持って言えるような大人になって欲しい。そのためには被害の歴史だけではいけないですよ。やっぱり加害の歴史もあわせてきちんと勉強するように、子供たちにも僕たちはやっていかなければ。

そういう意味でもこれからも大久野島でボランティア活動を頑張りたいです。僕の今の目標では75歳までは頑張ってやろうかなと。その後はできるだけ同じように大久野島の加害の歴史を伝えていく後継者を育てていきたい。アメリカ軍が闇に葬った大久野島の毒ガスの歴史を闇に葬ったままにはさせないぞというのが私の今の思いなんです。ちょっと興奮してしゃべりましたが、ありがとうございました。

私たちは決して加害のことを訴えるだけではなくて、中国の被害者とも交流をえています。その話を今度は毒ガス島歴史研究所の代表の山内静代が、また皆さんにお話しさせてもらいますので、よろしくお願ひします。

毒ガス被害者との交流

山内静代 皆さん、こんにちは。私は毒ガス鳥歴史研究所のメンバーの一員としてこのような歴史を掘り起こし伝えるという活動を行っております。今日は毒ガス被害者との交流についてお話しさせていただきます。時間の関係で2カ所に限ってお話しします。

日本軍が毒ガスを戦争中に使用して、村人約1000名を殺したという村が中国にあります。河北省の北垣村という村です。1942年5月27日のことでした。日本軍は、攻撃を逃れるために地下に逃れていた村人に対して、赤筒あかとうというくしゃみ性の毒ガスをその入り口から投げ込んで入り口にぬれた布団をかぶせて殺傷したんです。赤筒はくしゃみ性の毒ガスであって、殺傷性はないというふうに軍は言っておりましたが、密閉されたところに投げ込まれたらものすごい殺傷能力を持ちます。ですから、地下に逃げていた村人たちは大変な被害を受けました。たくさんの人たちが亡くなりました。辛うじて穴から逃げ出してきた人たちに対しては、日本軍は入り口で待ち構えていて、銃剣で刺し殺した。

そういう村があるということを知りまして、私たちは1998年にこの村を訪れました。大平原の中にトウモロコシがずっと植えてあって、その中に村がありました。その村の一角に小さな霊園がありました。その霊園で辛うじて生き残った体験者に、(幸存者といいますが)話を伺いました。

そのときの地下に逃れていたところに毒ガス弾が撃ち込まれたときの様子、これはもう本当に悲惨きわまりないものでした。地道ちどうの中に、いまだにたくさんちどうの遺体が眠っているというのです。その上で田畑を耕し、生活をしなければならない。掘り起こすことすらできないという話を聞いたときに、私はとても衝撃を受けました。投げ込んだ赤筒というのはもちろん大久野島でつくられたものです。

参加した私たちは言葉が出ませんでした。そのときただただ深く謝罪しましたが、これから謝罪だけではなくて、私たちにできることは何なんだろうと考えました。私たちがその気持ちをどう表わせばいいんだろうかと村の人たちと相談しまして、その後も毎年のようにその村に若い人たちを連れて学習に行く、そして事実を学ぶということをやっております。

2004年には実際に大久野島で毒ガスをつくった製造者の藤本安馬さんという人が、自分も連れていってくれと言われました。旅をした時は78歳です。ところが前の年の冬に胃がんを患い、末期がんと診断され、胃を全部摘出した。北垣村に行ったのが、その次の年の夏です。私たちは、とても命の保障がないからと躊躇しました。けれどもこの方は「どうしても命あるうちにいきたい。行って直接謝罪したい。娘を連れていくから」ということで同行されました。

写真のこちらは北垣村の李慶祥さん、攻撃された当時14歳だったそうです(写真⑥・左側)。家族と一緒に地道に逃げ込みましたところへ毒ガス弾が投げ込まれました。辛うじて逃げるのができたんですけど、お姉さんと妹さんと2人の弟さん、4人を失いました。藤本さんは「その毒ガスは私がつくったんです」、藤本さんは振り絞る声



写真⑥：毒ガスの被害者（李慶祥）と加害者（藤本安馬）

で言われました。そうすると李さんが「あなた方がやった侵略というのは鉄の事実で、消し去ることはできない。でも子供だったあなたたちもだまされてつくられ、そしてだまされて中国に兵隊としてやってきた。この歴史の事実をしっかりと踏まえて、これからともに平和に向かっていきましょう」と言われた。藤本さんはうなだれていました。でもこの2人は最後には平和に向かっていきましょうととも手を携えることができた。そのときの様子の新聞報道がありましたのでゆっくり読んでください（2004年9月15日『中国新聞』掲載）。

その後この村に資料館をつくりたいということがありました。私たちは日本で募金活動をして、資料館建設の一部にと寄贈したり、大久野島での毒ガスの事実をパネル資料として送ったりしています。小さな資料館ですけど、北坦村にも毒ガス戦の資料館ができました。今年の春も行きました。ちょうど4月5日の清明節、日本でお盆に当たる日でした。村の人たちがたくさん集まって、そこで慰霊祭とか平和について考えるという集いをしていました。写真⑦⑧はそのときに集まっていた子供たちですが、そこで私は話をする機会を与えられました。

私はここで話をするのは初めてだったんですけど、やはり大久野島での毒ガス製造の歴史の事実を話しました。それと同時に、その毒ガスによってこの村の人たちを殺傷した、そしていまだにその遺体がこの地の下に眠っている、そのことに対する追悼と謝罪の言葉を述べました。そして、この若い子供たちに、これからの平和な世界をつくっていくために頑張ってほしいということ伝えました。

憎いだろう日本人が目の前に立って話をしている。けれども、村の人みんなは静かに聞いてくださいました。そして終わった後子供たちが資料館の中を見学するんですが、高校生たちが一列に



写真⑦：北坦村平和集會に集まった中国の子ども達



写真⑧：北坦村で大久野島の毒ガス加害について語る

なって私に握手を求めてきました。「ニーハオ、ニーハオ」って。私は「ニーハオ、ニーハオ」、「シェイシェイ（謝々）」、それから「ツァイツェン（再見）」、この三つしかしゃべれないんですけど、それで子供たちとの心は何かしっかりとつながったような気がしました。

今も続く毒ガス被害

次にお話しするのは、中国遺棄毒ガス被害者の話です。戦争が終わった1945年8月15日以降、中国にいた日本軍は、残されていた国際条約違反の大量の毒ガス使用がばれたら困るということで、

毒ガスをすべて秘密裏に隠して帰れという命令を受けました。海があれば海、川、沼、それがなければ土を掘って、その中に埋めて、真っ平らにして全くわからないようにして逃げ帰れという命令で、夜のうちにこっそりとほんの数日間のうちに行われました。帰国したら一切しゃべってはならぬという命令です。ですから、いまだにどこにどれだけの毒ガス弾が、毒液が埋もれているか、沈んでいるか、わからない状態です。これがいま大変な問題を引き起こしています。

そのことを知ったのは1996年のことでした(1997年8月16日『中国新聞』)。本当にそうなんだろうか。やっぱり行ってきちんと調べる必要があるということで、翌年聞き取り調査のために中国東北部に行き、たくさんの方の被害者に会いました。本当に厳しいものでした。そのうちの一人、李国強さんについてお話ししたいと思います(写真⑨)。

李国強さんはチチハルの放射線科のお医者さんでした。チチハルの富拉亦基というところで工事中に一つの缶が掘り出されました。みんな中に何が入っているかわかりません。この中身を調べてほしいという依頼があり、彼は一生懸命調べましたがわかりません。そこで牛乳瓶1本分、研究室に持ち帰って調べました。彼は毒ガス被害を受け

33日間、意識不明の生死をさまよう状態に陥りました。辛うじて命は取りとめました。仕事を続けることはできず、退職を余儀なくされました。

連れ合いの王雅珍さんは小学校の先生でしたけれども、看病をするために彼女も体を壊して退職しました。2人の娘さんに恵まれ、幸せな家庭だったんですけど、一瞬ですべて奪われてしまいました。

そのとき李国強さんより、日本から今までいろんな人が聞きに来たけど、聞いて帰るだけで何の音さたもない。私は何とか命を長らえたいからその方法を教えて欲しい。そして、この被害のことを日本の国の人たちにしっかりと伝えてということをお願いしました。そこで私たちは、証言を聞くということは責任が生じることなんだということを変更して思い知りました。帰国して三つのことを行いました。

まず最初は、日本政府に対して謝罪と補償するようという要請書を送りました。二つ目は、大久野島の近くの竹原で毒ガスの障害者の治療に携わっている先生に慢性気管支炎の治療法について聞きました。それを中国語に翻訳して送りました。けれども、それでその方の病気がよいほうに向かうはずはありません。私たちもこの方の体のことを非常に心配しておりますが、やはり問題なのはこのことをほとんどの日本人が知らないことです。

まずは知らせる必要があるということで、三つ目は、この方に日本に来て証言をしてもらうことにしました。その次の年です。「中国遺棄毒ガス弾被害者と交流をすすめる会」というのを立ち上げまして、やっと実現することができました。竹原と広島で証言をしてもらい、病院でも診察をしてもらいました(写真⑩)。けれども、帰国して薬代は非常に高く、生活は非常に困窮しています。十分な治療も受けられません。しかも、昨年10月、李国強さんの薬を買うためにチチハルからハルピンまで行って帰る途中、30歳になる娘さん



写真⑨：遺棄毒ガス被害者李国強さんの証言を聞く



写真⑩：竹原での中国遺棄毒ガス被害者の証言集会
が交通事故で亡くなってしまったんです。手紙が来ました。「毒ガスは私たちの幸せを奪ったばかりか、娘の命まで奪うのか。私さえあのとき毒ガスに遭遇していなければ、中国大陸に毒ガスさえ来ていなければ、戦争が終わって平和な暮らしをしている私たちの生活を奪われることはなかった。」

いま李国強さんはそれだけでなくもう命のともしびが消える状況にあります。生きる希望さえも奪われている状況です。本当に私たちはこのことをどういうふうにとらえたらいいのだろうか。中国大陸ではこのような犠牲者が3000人以上もおられると聞いております。戦争が終わった後の、毒ガスの被害者です。

どうしてももう一つだけ聞いていただきたいことがあります。毒ガスはどこに埋まっているかわからないものですから、いつ被害が起きるかわかりません。今も起き続けています。一例は2003年8月4日の事故です。今から7年ほど前、チチハル市で地下駐車場をつくるために掘っているときに五つの缶が掘り出されて、そのうちの一つにユニボががーんと当たってしまって、穴があいて中から液がどろどろ流れ出てしまったんです。まさかその液が毒液とはみんな知りませんから、町の中で掘られた土をどこかへ持っていかなければい

けない。もうその土はうちの学校の校庭に下さい、道路の穴を埋めるのに下さい、公園に下さいという予約が来てたので、あちこちへ運ばれていきました。

そこへ遊びに来ていた子供たちが被毒しました。砂山で遊んでいた子供たちのうちの1人、女の子、馮佳縁ちゃんといいますが、当時11歳でした。毒ガスは手や足をずるずるにし、肉を腐らせ、神経を腐らせますから、考える力も奪いました。彼女の夢は陸上選手になることだったんです。走るのがとても速かったんです。だけど、今は走ることさえできないし、考えることさえだんだんその力を奪われています。

男の子もいます。王君。彼は公園で遊んでいて被害に遭いました。この子の夢はサッカーの選手になることだったんです。本当に上手でみんなから期待されてたんですけど、今はサッカーどころではありません。子供たちは日本政府に訴えています。私の夢を奪わないでくださいと。

このときには44人も犠牲者が出ました。この方(写真⑪)は10数日後に亡くなってしまったん



写真⑪：2003年8月遺棄毒ガス被害で亡くなった中国遺棄毒ガス被害者

です。残念なことに日本政府は何度裁判に訴えてもいまだに補償も謝罪もしていません。日本国民として私たちはこういうことを許してはならないと思います。

先ほども話がありましたが、広島原爆被害のことは本当によく知られています。まだまだ知られていない実相もありますけど、まずは知られています。けれども、毒ガスのことについては本当に知られていない。特に大久野島の毒ガスについては、製造したことによってもものすごい被害を受けましたけど、その被害者であると同時に、製造者は加害者にならされてしまう。戦争というのは被害、加害、この両面を必ず見ていかなければいけない。残念ながら、日本の私たちの周りというのは、被害面は随分学ぶことが多いと思いますが、本当にたくさんある加害面についての学習というのはなかなかないのではないかと思います。

ノーモア・ヒロシマ核兵器、ノーモア・大久野島化学兵器、そしてノーモア戦争、これを微力ながら訴えて私たちは平和学習お手伝いのボランティア活動しております。今日はどうもありがとうございました。

注

- (1) 本論は、多数の写真を示しながら行われた講演の記録ですが、言及されている写真のすべてがここに掲載されていないことをお断りしておきます。
- (2) 1942年6月5日アメリカ大統領ルーズベルト大統領の声明、および1943年6月8日ルーズベルト大統領の声明と、二回にわたって警告声明が出された。(吉見義明著、2004年、『毒ガス戦と日本軍』、岩波書店、232-233ページ)